



森のなかま

2010年 3月号

No. 23 (継続168)

NPO法人かながわ森林インストラクターの会 <http://www.forest-kanagawa.jp>

発行人 島岡 功



第61回
全国植樹祭 かながわ
2010

神奈川県環境農政部森林課全国植樹祭推進室長 下元 省吾

特定非営利活動法人かながわ森林インストラクターの会の皆さまにおかれましては、第61回全国植樹祭の開催準備について、日ごろから格別のご支援とご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

昨年5月のプレ全国植樹祭をはじめ、カウントダウンセレモニーや森のリレーフェスタなどの数々の記念事業もおかげを持ちまして、無事成功のうちに終了することが出来ました。

いよいよサテライト会場でのイベントも始まり、全県が5月23日(日)の第61回全国植樹祭開催に向け、盛り上がってまいりました。

皆さまもご存じのように、神奈川県には、丹沢大山や箱根といった山地から、里山や市街地近郊の樹林地まで、県土の40%近くを占める約9万5000haの森林があります。しかし、丹沢大山の奥山ではブナやモミが立ち枯れ、奥山よりもっと身近な山地や里山でも手入れ不足等により森林の荒廃が進んでいます。本県では、「かながわ森林再生50年構想」を策定し、荒廃した森林をよみがえらせ、多様な生き物が生きられる豊かな森へ再生し、森林のさまざまな恵みを次の世代に引き継ぐため、県民や企業、団体の皆さまと一緒に様々な取組みを進めております。第61回全国植樹祭は、50年後の神奈川の森林の新しい姿を県民全体で共有し、協働して取り組む本県の森林再生を全国に発信しながら、さらに前進させる大きな節目として開催するものでございます。

式典では大会テーマ「森が育む あなたの心 森を育む あなたの手」に込められた、森と人との深い関わりや、森を育てることが人々の未来を作ることに繋がるという想いを、サインマ임(手話を取り入れたパントマ임)、未来を担う子供たちによるダンスパフォーマンスやアニメーションなどで皆さまにお伝えし、楽しみながら森林に思いをはせていただければと考えております。また当日は、5,500人の招待者の方々に、本県の森林再生の姿を体感いただきながら植樹いただけるよう、会場づくりを進めております。皆さま方には、植樹会場で様々なお力添えをいただきたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。

また、全県をステージとして13の市町と協同で設置するサテライト会場では、代表者や参加者による植樹を行い、全体で2万本以上の植樹を行いますとともに、パネル展示、大会テーマソング「森へ行こう!」演奏などのアトラクションを行っております。そのほか、大会当日の式典アトラクションとして2会場連携セレモニーの中で紹介しながらタイムカプセルに納める「未来へのメッセージ」の募集を行っておりますので、皆さまがたも是非、メッセージをお寄せください。(タイムカプセルは全国植樹祭大会終了後、大会会場付近に埋め、50年後に開封する予定です。)

50年後に神奈川の森林が立派に再生されることを夢見て、皆さまの一層のご支援をお願いいたしますとともに、特定非営利活動法人かながわ森林インストラクターの会様のますますの発展をお祈り申し上げます。

植樹祭

飯村 武

「植樹祭」それは、記念・祝賀・宣伝などの一環として木を植え、緑化思想の高揚を図る集団的行事、となるであろうか。

来る5月23日に、南足柄（植樹）と秦野（植樹と式典）両市を会場とし、天皇、皇后両陛下をお迎えして「第61回全国植樹祭」が開かれる。

全国植樹祭は昭和25（1950年）年の山梨県での開催を第1回としており、神奈川県にとっては回数的に今回が初めてのこととなる。しかし、現実には、その前年に両陛下をお迎えして植えたヒノキが箱根町の一角に生育している。この経緯について、当時これを企画実行した諸先輩は、苦笑しながら「第0回全国植樹祭」と呼んでいる。その心情は察するに余りありだが、それはともかく全国や県の植樹祭はどのようにして誕生し、今日に至っているのだろうか。

第2次世界大戦によってわが国土は極度に荒廃した。その復興を期する目的で昭和23（1948年）年4月、森林愛護連盟、全日本観光連盟及び東京都林業会の共催、農林省、運輸省等の後援により、都下青梅地内に両陛下をお迎えしてヒノキの植樹を行った。これが植樹祭の事始である。当時の正式名称は「愛林日植樹行事」であった。

翌、昭和24（1949）年4月4日、前期連盟等の共催、及び関係各省の後援、神奈川県協賛のもとに、箱根町仙石原（足柄下郡仙石原村湖尻）の県行造林地に両陛下をお迎えし、ヒノキの植樹を行った。当日は農林大臣、中央官庁職員、内山岩太郎県知事及び関係職員が出席し、県内の有志多数、地元仙石原小学校・中学校の児童生徒、米軍人とその家族など5,000人を超える参加があった。この行事は同時に本県植樹祭の起源となった。

この時の記録写真が3葉ある。1葉はその題名が「全国植樹祭（仙石原）」で、乙女峠あたりを背景に両陛下が並んで（天皇陛下が左）お立ちになり、参加者が両陛下を囲む中、内山知事が現場の様子や県内事情を説明しているところ。服装はオーバー着用で帽子（天皇陛下は中折れ）姿。他の2葉は天皇陛下が腰をかがめ、唐鍬でヒノキの苗を植えているところ。介添役は徳川宗敬森林愛護連盟会長。徳川さんは徳川御三家水戸藩のご出身で「江戸時代における造林技術の史的研究」の著書もある農学博士、参議院議員で国土緑化推進委員会の理事長を長く務められた。

ともかく、2回の植樹祭の実績と箱根での全国植樹祭開催の発議によって、緑化の動きは大国民運動へと発展し、昭和25（1950）年1月、国に前期推進委員会が、また地方には都道府県推進委員会が組織された。これらの新組織により同年4月、両陛下を山梨県にお迎えし、全国植樹祭が行われた。正式名称は「第1回植樹行事並びに国土緑化大会」で「全国植樹祭」の名称になったのは福島県の第21回からである。なお、全国緑化推進委員会は昭和63（1988）年3月にその名称が「国土緑化推進機構」に更められ、全国植樹祭の主催は同機構と開催都道府県となった。

植樹祭の式典では、天皇陛下の「お言葉」両陛下による「お手植え・お手まき」行事、県内外の参加者による記念植樹、緑化功労者表彰、緑化運動ポスターコンクール等の表彰、大会宣言が行われるのが恒例であるが、平成21（2009）年からはお言葉は取りやめになった。なお、お手植え、お手まきで成長した木の手入れ（枝打ちなど）をする目的で、昭和52（1977）年の秋から皇太子・同妃両殿下のご出席を得て、「全国育樹祭」が行われるようになった。

植樹祭では地域の心情などを反映したテーマが掲げられる。第60回の福井県の場合は「未来へつなごう元気な森 元気なふるさと」第61回の神奈川県の場合は「森が育むあなたの心 森を育むあなたの手」である。

既に開催した都道府県一覧はインターネットにより「全国植樹祭」で検索できる。ちなみに参加者は約1万人である。神奈川県で行われなかった理由の一つは会場の確保にあった。今回の予定参加者数は約6000人である。

箱根町仙石原での第0回全国植樹祭を起源とする神奈川県植樹祭は、どのように進められたのだろうか。

国の動きに呼応し、昭和25（1950）年2月に県緑化推進委員会が設置され、同年4月の「緑の週間」中に秦野市の弘法山で第1回神奈川県植樹祭が行われた。当時本県の里山の多くは裸地の状態で、要造林地が1万3千^{ヘクタール}に及び、各種災害の原因、経済復興の阻害要因であった。そのため委員会は県の総合緑化計画にそって県民の造林意欲の高揚を図り、緑化思想啓発の活動を開始したのである。

かくて第1回から第6回までは各地方事務所（現地区行政センター）毎に、「緑の週間」内に県下一斉に行う形をとった。行事は県民参加による植樹と緑化功労者の表彰が主な内容である。

第7回からは地方事務所の輪番制になった。その最初は鎌倉市葛原ヶ丘で行われた。テーマは「僕らも一役 お国の緑」であった。県警音楽隊が「美しき神奈川」を奏でる中で200本余のサクラの苗木が植えられ、強い息吹きが県下全域に漲った。

第8回は愛甲郡清川村で開催したが、地域の林業振興に資するとし、植栽樹種をスギとした。この傾向は昭和41（1966）年の第17回まで続く。

昭和42（1967）年の第18回から20回までは都市緑化を目指したもので都市公園で行われ、林業振興のそれは各地方事務所毎に行われた。昭和45（1970）年には都市部（川崎市）と山村部（津久井町鳥屋）の2カ所で行われたが、昭和46（1971）年の第22回からは再び地区ごとの輪番制とし、山村振興を目指して進められた。

昭和51（1976）年の第27回からは面目を一新して一般県民を公募して行うようになり、祭の輪はいっそう広がった。宮ガ瀬ダム完成記念の植樹祭以降は水産関係者も参加するし、わが「神奈川県森林インストラクター」の諸君が、式典舞台で木の性質や植樹の仕方を解説するなど、式典の一環を担うこととなったあたり、**名実共に、と特筆しておきたい。**

緑に対する神奈川県民の目はいま、水源環境の保全に注がれている。平成18（2006）年10月、宮ガ瀬湖畔で行われた植樹祭の植樹会場は、同湖上流早戸川の魚止めというところで、河畔林の復活を目指し、ヤシャブシやハンノキなどが植えられた。式典会場における主催者・松沢県知事の挨拶は『計画・税制・県民参加の3つの柱で水源環境の保全再生に取り組む』で正に「森は海の恋人」を実感するものであった。

植樹祭は市町村や森林組合などが、草の根的に随時行っていることも忘れてはならない。ともかく箱根での第0回全国植樹祭から60年余が経ち、世は昭和から平成へ、20世紀から21世紀へと移った。緑を想うとき、今私たちの目前には即座に、熱帯林の著しい減少、砂漠化、地球温暖化CO2森林貯留の役割などの問題が浮かび上がる。今秋には「生物多様性条約締約国会議」（COP10）が名古屋市で開かれる。額に汗する「植樹祭」を通じ、これらについて新たな展望をしたい。



飯村 武さんの横顔

1928年6月11日 茨城県生まれ
1950年、東京農林専門学校
（現・東京農工大学）林学科卒業・
神奈川県職員となり県立自然保護センター長を最後に
1987年退職。

主な著書：

「シカの生態とその管理」（大日本山学会）「決定版生物大図鑑 動物」（共著・世界文化社）
「鹿のフンは何故つぶつぶ？」（神奈川新聞社かなしん出版）「動物生態学への招待」（山海堂）
「森と環境を考える」（丸善ブックス）森は全ての生き物を育て、川を潤し海を豊かにする力を持っている。いまこそ、都市と農山村は手をつなぎ、森を語り、森林のために額に汗するときだ。
（森と環境を考えるから・・・）

平成2年6月1日、神奈川県森林インストラクター認定

併せて「森林チーフインストラクター」の指名を受ける。会員名簿は<1期 1>です。県民等に対し森林教育（森林の環境教育）後継森林インストラクターの養成。養成講座の講師、（講義項目は動物生態、森林文化助言と指導方法、インストラクターの心得等）養成講座検討委員会、養成講座テキスト作成委員会、養成講座受講者選考など「森の先生」として活躍、なお、**神奈川県の森林インストラクターの制度**は国に先駆けて発足しており、国の制度のモデルとなった。この点に神奈川県森林インストラクターの諸君の誇りがあり、県、トラストみどり財団（旧森林づくり公社）と有機的に活動し、正に地方の時代の第1線を担っている。今後の方向として、これまで以上の経緯を軸とし、森林インストラクター活動のあり方を求め、その基礎固めに専念してきたが引き続き「県民参加の森林づくり運動」への参加活動を進め、これらを通じて後継のインストラクターの諸君と共に研鑽と資質の向上に努める。一方、「かながわ森林インストラクターの会」の月刊機関紙「森のなかま」は会員活動の拠である。広く「森の環境問題」を捉え、本誌への執筆その他を通じ会員と共に、**親林活動・森の環境活動の活性化を図って行きたい。**

私の認識

野鳥その76

高橋 恒通

前稿は可憐で美声で日本特産種のノジコをご案内しました。ノジコは夏鳥でしたので今回は冬鳥、但し対馬では留鳥のミヤマホオジロ（漢和名：深山頬白、英名：Yellow-throated Bunting, 体長L = 16cm）をご紹介します。

ミヤマホオジロを見分ける最大のポイントは、特に成鳥の頭部に目立つ黒色の冠羽、黄色く太目の眉斑、黒色の過眼線、そして喉下の黄色と黒色の胸前です。

成鳥は上記の黒色の部分が褐色で、恰も「黄色の眉斑のあるカシラダカ」をイメージすればピッタリです。従って冬季の探鳥会でカシラダカらしいものを見付けた時には、ミヤマホオジロの可能性も頭の隅に残して観察する事は必要だと私は認識しております。

その時の注目するポイントは眉斑が黄色味を帯びているか否かを確認する点です。ミヤマホオジロでしたら共に眉斑は濃く、は淡く一が黄色だからであります。



ミヤマホオジロ

棲息環境は、開けた里山の林、農耕地、草地で、地上を跳ね歩き乍ら、草の種子、クモ類、昆虫類を採食します。

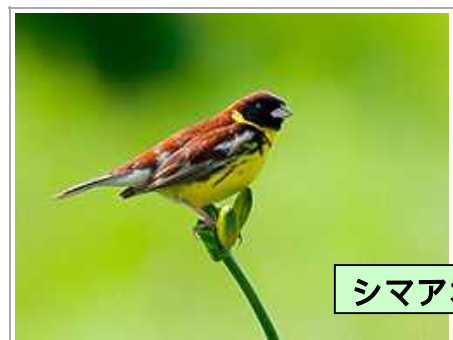
私の経験では、林縁の地上や樹木の低い所にある細い枝などに、多くて

数羽の小群で行動しています。そして黄色のハッキリしたに出逢った時は嬉しいかぎりです。

ミヤマホオジロは、西日本では多く、東日本では寡ない野鳥と言われてまして、私がビギナーの頃の神奈川県下では、特定の地域でのみ毎年観察できる種だと思ってました。然し昨今では県下でもあちこちで観察されており、温暖化との係わりが否定できません。尚、地鳴きはカシラダカと同じく細かい声で「チッ」又は「チッチッ」と発声します。

続いてのホオジロ科の野鳥は夏鳥のシマアオジ（漢和名：島青、英名：Yellow-breasted Bunting 体長L = 15cm）をご案内いたします。

地味なホオジロ科の野鳥の中で、最も派手な体色を成鳥に見る事ができます。



シマアオジ

黒い顔と喉、頭頂から上背面は錆茶色、スカーフを巻いた如き喉下の濃黄色、そして胸前から下面にかけても濃黄色、大雨覆（オオアマオオイ）の羽先と中雨覆にブーメラン形の白色が大変に目立ちます。

成鳥は、顔に黒色が無く濁褐色、雨覆にも白色が無く、黄色の部分も全体に燻んで目立たない姿だと認識しております。

採食行動はホオジロ科共通です。但し、日本では主に北海道の低地の草原に渡来して繁殖しますので、私達の居る神奈川県下では観察できません。かく申す私も剥製しか見てません。

CDで聴くと囀りは“ピョーピョーピュチィピュチィピュチィ”と澄んで、のびやかな透る声です。図鑑ではハマナスの枝先で啼く姿を見ます。

私の鳥友の話に拠ると、夏の北海道の草原では10年ぐらい前の頃はシマアオジと「草原のジャズシンガー」と異名をとるコヨシキリの囀りが爽やかな風に乗って良く聞こえたそうです。然し乍ら近頃は、シマアオジの澄んだ声が大変に少なくなったそうです。

シマアオジはユーラシア大陸の中～高緯度地域で繁殖し、冬季には中国は広東省から雲南省にかけての地域で越冬する野鳥です。

鳥友の話では、中国でシマアオジは“空飛ぶ人参”と呼ばれ、滋養があって美味しい高級食材のひとつだそうです。故に捕獲されて富裕層に食べられる為に数が減ったのが原因のひとつかも知れないと言っていました。『飛行機以外で空飛ぶものは何でも食べる』と言われる中国人らしい話だと思いませんか・・・*

< 参考資料 >

日本の野鳥 山溪ハンディ図鑑7 写真・解説 / 叶内拓哉、分布図・解説協力/安部直哉、解説（鳴き声）/上田秀雄、山と溪谷社。

とり、自然ガイド、浜口哲一・文、佐野裕彦・絵、文一総合出版。

日本の野鳥、山溪カラー名鑑、編・高野伸二、山と溪谷社

グランド現代百科事典5、研究社

写真：yahoo 百科事典より（ミヤマホオジロ）

” ウィキペディアより（シマアオジ）

自然観察部会の **森林ハイク**
三浦アルプス“春の息吹を感じてみよう”
 2月7日(日)新逗子から田浦梅林へ

自然観察部会が一般市民を対象として年3回行なう森林ハイク・森林探訪は、好評でいつも大勢の参加者でにぎわいます。今回の森林ハイクはかながわトラストみどり財団との共催で、『県のたより』に募集を掲載したこともあって応募者は296名。抽選の結果、125名の受付をしました。

三浦アルプス（今回は逗子市新逗子から二子山を経て横須賀市の田浦梅林まで）は名前からも想像できるように通常の森林探訪より距離が長い上、小さな登り下りが連続して、かなり歩きごたえのある場所です。自然観察する上では適しているとは言えないかもしれませんが、古代から自然と共に人が暮らし、その証の史跡や自然が今も残っている魅力あるコースです。昨年2月に候補地として踏査を行ない、昨年12月には、実施に向けての踏査、それから下見を3回行ないました。大勢のインストラクターが歩き、険しい下りのルートを変更したり、降雪後で滑りやすい道を苦労しながら歩いたり、下見の都度の反省を踏まえて、「安全に、無事に案内する」準備を重ねてきました。

当日は、快晴で身を切るような寒さの中を早朝から参加者が京急新逗子駅に集まって来ました。受付を済ませてオリエンテーションをする広場まで順次案内しましたが、参加者90名、財団・インストラクターの関係者が20名の大所帯で、早くから来られた方には待ち疲れた方もいたようです。11班に分かれてスタートしましたが、最高齢が77歳との情報もあり、参加者の様子を気遣いながら安全に、最後まで歩き通していただくために、ゆっくり歩を進めての案内です。平野部では風が強かったそうですが、三浦半島は穏やかで、コースの所々から青空の向こうに富士山、南アルプスの雪山、丹沢、箱根の山々、伊豆半島・天城の山々、房総半島などを望むことができました。

森林ハイクのテーマでもある、春の息吹は随所にみられ、ニワトコをはじめ樹木の冬芽の膨らみや、春を告げるスミレ、ヒメウズ、オオイヌノフグリなど花々にも出合えました。野鳥の声を聞き上二子山の山頂の陽だまりでお弁当を広げました。合唱をした班もありました。



長柄・桜山古墳群 第2号墳の展望台からの眺望

田浦梅林では梅の香を楽しみ、「疲れたけれど満足」との声が多く聞かれました。インストラクターの評判は大変良く、豊富な知識や参加者に対する気遣いなどに多くの方々が満足されたようでした。「相応の努力をしている」と認めてくださった上で、「一層の精進を期待している」とのエールもいただきました。今回初めて参加された方が多かったので当会の活動の良い紹介ができたのではないかと思います。自然観察のスタイルは様々で、季節や場所や参加者で異なりますが、時には今回の様な観察会があってもいいのではないかと思います。自然や森林の解説プラス、人の暮らしや歴史・文化なども合わせて案内ができればいいなと感じました。また、大勢の一般の方を対象とする計画の難しさも感じました。インストラクターの先輩方が築いてこられた森林探訪（財団との共催は森林ハイク）ですが、その一つに計画から携わり本当に有意義な時間を過ごすことができました。資料作成、下見時の様々な体験と対策、そして無事に終了した充実感、全てが貴重な経験になりました。ご助言・ご協力いただいた皆様本当にありがとうございました。

チーフリーダー・内野ミドリ（9期）



田浦梅林にて

活動短信

1/18 ~ 1/31

森林講話

日 1月22日(金) 10時35分~12時05分
 場 小田原市立三の丸小学校校舎
 参 5年生 32名、教師1名、
 財 鳥海

足柄グリーンサービス 2名(傍聴)

イ 宮本

5年生の教科に関連して「森林の役割や森林づくりについて理解を深める」というのが学習のねらい。2月23日に21世紀の森に於いて体験学習を行うことを前提に講話を行なった。昨年12月25日、21世紀の森に於いて担任の楠教師、トラスト古館氏、足柄グリーンサービス担当者と私で体験学習の内容、場所および1月22日の講話の内容について事前協議を行った。

講話の内容について学校側の希望は、森林の役割、森林づくりとその保全について山林ばかりでなく、町の緑のような身近な課題に子供が関心を持つような講話、また現時点では21世紀の森で体験学習を行うことを子供に全く知らせていないので、子供が自発的に体験学習をしたいと言い出すような講話をお願いしたいという難しい課題をいただいた。

私にとっては初めての体験であったが、プロジェクターを使って映像を見せながら講話を行うことにした。講話のストーリーの組み立てとそれに伴う写真撮影、USBへの取り込みには結構苦労した。森林の認識などについてのイントロの後、ストーリーとしては、映像で先ず身近な森として小田原城、公園、街路樹、砂防林などの森林役割を理解させたのち、山地の森林を遠望し、近づき、森林に入って、色々な森林の役割を学習するというイメージにした。「木を見て森を見せよう」と考えのもとに、樺の輪切りピースを配り、質問を交えながら年輪、光合成、温暖化の問題にも触れたが、5年生では全く理解できないだろうという事前の予想と違って、子供たちがこれらの事柄について結構知識を持っているのに感心した。我々が子供たちに森林の役割を説明する場合、今や光合成や地球の温暖化について避けて通れないので、適切な説明方法を考える必要があると認識した。

次のテーマの「森林づくりと保全」については、トラストから借用した「神奈川の森林と林業のはなし」というビデオテープを使用させていただいた。

講話を終わって説明不足の点など反省することも多々あったものの、大変良い経験をさせてもらった。なお、映像は35駒中17駒は紙芝居を使用した。

茅ヶ崎の砂防林の写真を提供いただいた鈴木松弘氏(5期)講話の放映のサポートをいただいた鳥海氏に感謝いたします。(記 4期 宮本)

第3回 森林づくり体験教室

日 1月23日(土) 10時~15時 晴れ
 場 厚木森林組合木々館・七沢地区民有林
 参 21名
 市 森林環境部 橘川・農業振興課・市川課長
 県 農政部森林保全課・野口課長、
 伊 高橋

講義 10時~11時半

テーマ「これからの森林の未来を考える」
 スギ、ヒノキの人工林、クヌギ、コナラ等中心の里山の森林を含め、手入れされ健全な状態の森林の数々の公益的な働き、機能を説明した。ところが現状は様々な理由で手入れがされずに放置され荒れているのでこれを私達の「環境財」と言う認識の合意形成をし、自分達の出来る手入れを行い続ける事の意味と必要性について説明した。

実習 12時半~15時

<スギ、ヒノキの人工林の枝打ち、間伐体験>
 七沢地区にある手入れされていない民有林に行き、3班に分かれて森林組合員の実技指導でヒノキの枝打ち(ムカデ梯子使用)スギ、ヒノキの間伐を体験。私はアドバイスをを行った。尚、作業に入る前に組合員より枝打ち、間伐の意味、目的の説明及び作業安全の為の注意。ラジオ体操も併せて行った。

(記 3期 高橋)

県民参加の森林づくり活動

日 1月24日(日) 8時半~13時40分 晴れ
 場 足柄上郡山北町岸(丸山)
 参 一般参加者 71名
 県 三尋木
 財 鳥海、永島、
 地 湯川(山北町産業観光課) 尾崎、
 伊 L三浦、井出、佐藤恭、国分、清水、
 長谷山、滝澤、伊藤、飯澤、小沢、
 女川、酒井、杉崎、宮下、矢澤、
 青木、
 研 10期5名

集合場所の新松田駅より作業現場に着く頃には、冬の寒さも和らぎ絶好の作業日和、高台の作業現場をちょっと登れば富士、金時など眺望も良い。山北町産業観光課 湯川さんの挨拶で始まる。5班に分かれ作業開始。今回は高校生や東京農大の女子学生等小グループの参加がいくつかあった。

現場は、スギ・ヒノキの枯れ木が多く伐倒しても、掛かり木になったり非常に気を使う所でしたが、怪我人も無く無事終了。この講座は三浦リーダーの「雨水の利用」について話され参加者は興味津々で大成功でした。(記 10期 青木)

生活科学習の時間 ~ 森で遊ぶと楽しいね ~

日 1月27日(水)9時~11時半 晴れ
場 箱根町立箱根の森小学校・学校林
参 2年生・30名、佐宗校長・教師2名 他保護者
財 古館
イ L小清水、白畑、石原、村井、
 「学校林*ヒノキ林になにがあるかな?」そしてその裏には「間伐の仕方」そんなパンフを作って子供たちと初対面。小学校2年生のつぶらな瞳がいつせいに私達をみつめる。教室で軽いミーティングの後、観光バスのようなスクールバスで学校林へ。明神登山の途中にある15年ものヒノキ林の斜面を下りながら、自然観察、<ギザギザの葉、イノシシの糞、亀の形の葉、Yのマーク、ヒノキのサッカーボール、そして一番人気はスズタケの笹>・・・4班入り混じって大騒ぎ。間伐はリーダーの小清水さん、白畑さん、石原さんの女性陣、私は解説にまわる。危険と言う事が子供たちは見学・・・でもヘルメットを貸してあげて、ケーキ入刀のように軽くノコを引かせてあげたら、凄い感動だったと思うとちょっと残念でした。玉切りと急斜面の搬送には嬉々として参加。帰路のバスで女の子から私達4人に(古館さんにも)手作り笹船のプレゼントがあり感激しました。私がこの活動で一番、感動したことは、先生方も他のインストラクターも気がつかなかったと思いますが、学校林に入っただけで、2人の生徒が自主的にゴミ拾いをしてくれたことです。森で遊ぶと楽しい半日でした。(記 9期 村井)

自然観察

日 1月18日(月)8時半~12時 晴れ
場 やどりき水源林
参 松田町立寄小学校 5年生 12名
財 古館
イ L武本、高橋、
 当日は天気恵まれ、寄小学校から水源林まで自然観察しながら歩きました。初めてのプロミナーを通じて観る鳥の姿は子供たちにとって感動的なものとなったようです。肉眼ではわからない羽根の美しさ、嘴の鋭さなど忘れられない記憶となったことでしょう。
 - 冬芽の観察も新たな世界の発見になりました。
 くるみの葉痕は羊や犬に見えましたー
 子供たちにとって水源林は身近にあって遠い存在でした。大切な水を蓄えてる森、野生生物の棲家となっている森、など理解し自分達が住んでいる地域が素晴らしい場所だと理解しました。

生徒の数人が自主的にゴミを拾い学校まで持ち帰ってくれましたが、これが水源林を守り、自分達の地域が誇りになった証拠だと嬉しく思いました。(記 7期 武本)

「平成21年度 川崎市里山ボランティア育成講座」第5回(最終回)

日 1月30日(土)
場 黒川青少年野外活動センター(川崎市麻生区)
参 一般市民 25名
スタッフ 川崎市公園緑地協会ほか 6名
イ L松崎、宮本、伊藤、渡部、井口、清水、
 川崎市公園緑地協会が実施する「里山ボランティア育成講座」シリーズ平成21年度の第五回目(最終回)。今回は麻生区黒川にある青少年野外活動センターで、午前中 植樹後の手入れ、竹の間伐、自然観察会、こんにゃく作り、薪割り、と火起こしの五つのアイテムを参加者の希望に応じて分担して行った。昼休みにはこんにゃく班が作ったこんにゃく汁を全員で食した後、2班に分け、樹木クイズ、竹藪作りを行った。午後は「植生調査と記録の残し方」というテーマで藤間ひろ子さんが講義を行った。3時から閉校式が行われ、公園緑地協会の土田理事長から講座修了証が授与された。5回の活動を通じ、参加者には里山整備の知識と共に整備活動の重要性に対する認識が高まったように感じた。協会では22年度も少し方式を変えながら引き続き育成講座を実施していく予定とのこと。(記 5期 松崎)

スーパードライ「うまい!を明日へ!」プロジェクト第2弾

日 1月31日(日)10時~12時半
場 県立21世紀の森
参 100名
主 JTB職員、アサヒビール職員、21世紀の森職員、
イ L久保、島岡、竹島、

21世紀の森をフィールドにしたJTBとアサヒビールの共催企画の第2弾。内容はアサヒビールの森の間伐材を使っただけの「絵馬」作りと金太郎コースでの森林ウォーク。3名のインストラクターは1班17名、45分間の森歩きを2回ローテーションで担当する。参加者のほとんど全てが21世紀の森が初めての方。短い時間ではあったが、地球温暖化と森林、水源の森と神奈川の水の話を変えながら森を案内する。降る雨が緑のダムに沁み込む如く、私たちの話が来訪者の心に伝わっていく様が嬉しい。楽しい森歩きの最初の一步になってくれればと願う。

(記 3期 竹島)

広報部からのお願い***

- *活動短信 早めの報告をお願いします。
 記載事項 リーダー名 参加インストの期を忘れずに。財団・県他参加者名 看護師名 報告者名と期、等よろしくをお願いします。
- *極力短信でお願いします。
- *長信はA4 1ページ差し上げますので投稿大歓迎します。(M)

やどりき水源林
ミニガイド

やどりき水源林*雪景色

2月のトピックス



今冬は降雪が多かったですね



写真：広報部（鈴木松弘）

3月の水源林



写真：広報部 M

ミツマタ開花まじか 2/21

成長の森にて

「森の案内人」情報

実施時間：毎週土曜・日曜・午後1時より1~2時間程度（冬季休止）

集合：水源林入口ゲート前

内容：森林インストラクターが自然観察にご案内します。森林のしくみ・手入れなどについて説明いたします。

参加自由、参加費無料

*10人以上の団体は事前に下記までご連絡ください。

問合せ：(財)かながわトラストみどり財団 TEL:045-412-2255

fax:045-412-2300

● ホームページ：：<http://www.ktm.or.jp>

● E-mail:midori@ktm.or.jp

● やどりき水源林までの道順

小田急線新松田駅または JR 御殿場線松田駅下車、富士急湘南バス「寄(やどりき)」行き乗車約25分。バス下車後(案内板あり)川沿いに徒歩35分。

寄大橋の右横が水源林ゲートです。

一般の方の参加大歓迎

皆様お誘いのうえどうぞ!

新緑の三廻部林道・やどりき水源林を歩く

かながわ森林インストラクターとともに自然を楽しんでみませんか?

4月24日(土) 雨天決行 集合：小田急「新松田駅」 8:15

路線バスにて寄(やどりき)バス停 解散 小田急「新松田駅」15時半頃

募集人員：100名<応募多数の場合は抽選>参加費：500円+バス代往復980円(自己負担)申し込み締め切り：4月15日 問い合わせ・申し込み：〒223-0061 横浜市港北区日吉4-10-12 電話：045-563-2281 かながわ森林インストラクターの会・自然観察部会・野田重雄まで・「往復はがき」にて行事名・参加者全員の氏名、住所、電話、年齢を明記して応募ください。

< 編集後記 >

少人数制、日帰り森林ツアーを開始しました。2月の第1回目は知り合いの若い方々を対象として千葉に所有する山で自然観察、癒し体験、ダッチオープンなど、疲れている方々のリフレッシュを狙いとしてしました。これから毎月実施します。(金森)

驚いた。米国の発電は、80%が石炭だった。石炭生産量は、米国がこれまた世界一。皆さんご存知ですか。我が家、灯油消費、12月~2月=18L、かなりの省エネと思うが、如何。夜の底冷えは、焼酎割で一杯参る。(鈴木松弘)

「松田町の桜も見ごろを迎えているようです。去年拾った栃の実、そろそろ冷蔵庫から出して植えようと思います。さて、発芽はいかに？」(川森)

オリンピック観戦で一番はまったのはカーリングです。わずか一投で局面が変わるカーリングの醍醐味を知りました。ハラハラドキドキ、心臓には良くないです。(井出)

先月は天候不順な日が続きましたが、寄で目の覚めるような雪景色をほんの半日見ることができました。いよいよ春近し。(鈴木朗)

なんだか、植物たちの冬芽が膨らみ始めていませんか?春が待ち遠しい時期になりました。植樹祭まであとという間ですね。(森)

全国植樹祭に向かって身心共に健康で行かねば・私達、かながわ森林インストラクターの会の大事な出番に150名態勢一致団結して成功させましょう!5月22日、23日を忘れずに。(村井)

年間購読のお申し込み

「森のなかま」年間購読をご希望の方は、郵便局備付けの郵便振替を利用してお申し込みください。

郵便振替口座 00230-0-2454

かながわ森林インストラクターの会宛まで購読料年2000円をお振込みください。振替用紙には、必ず、住所、氏名を明記してください。

振替用紙到着の翌月号から12回/1年間お届け致します。

(領価 200円 送料共)

編集人：村井正孝

広報部：井出恒夫(HP) 鈴木松弘

金森 徹 森本正信

森 義徳 鈴木朗 川森健司